

主観的な報告者 — フランツ・カフカ『あるアカデミーへの報告』における語りの形式 —

山下大輔

はじめに

フランツ・カフカ（1883-1924）の動物物語『あるアカデミーへの報告（Ein Bericht für eine Akademie）』¹は、彼のもう一つの作品『ジャッカルとアラブ人（Schakale und Araber）』とともに、1917年の10月に雑誌『ユダヤ人（Der Jude）』の誌面で公開された。もともと、雑誌公開のためにこの二つの作品を選定したのはカフカではなく、雑誌の編集責任者を務めていたユダヤ人哲学者マルティン・ブーバー（1878-1965）であった。それに先立つ同年の4月に、カフカはブーバーに12の散文作品を送っている。その中からブーバーによって上記の二作品が選ばれた。

『あるアカデミーへの報告』の語り手ロートペーターは、一匹の猿である。彼はいま「アカデミー」に、自身の半生についての「報告」を提出する。かつてアフリカの自然の中で暮らしていたロートペーターは、ハーゲンバック社の狩猟遠征隊に捕獲され人間の世界にやって来た。当初は狭い檻の中に囚われた八方ふさがりの状況であったが、ハンブルクまでの航路の途中、人間の身振りを真似ることをおぼえた。ロートペーターいわく、それは彼に「出口（Ausweg）」へと到達することを可能にしたという。つまり彼は、この芸によって檻から解放され、ヴァリエテで曲芸をおこなうという猿としての居場所を人間社会に確保した。その後さらに言語を習得した彼は、いまや「アカデミー」に自身の「猿としての半生（äffisches Vorleben）」について報告することを求められるまでになった。『あるアカデミーへの報告』においては、ロートペーターが「アカデミー」に提出する「報告（Bericht）」の内容がそのまま物語内容となっている。この物語はこれまでさまざまな観点から研究がおこなわれてきたが、² 物語論的な角度から語

¹ Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt am Main 1994, 以下同書からの引用はDと頁数を記す。

² 一例として、芸術家の問題、ロートペーターを成功者とみなす解釈、宗教的な観点、ユダヤ人問題などがあげられる。Beicken, U. Peter: *Franz Kafka. Eine kritische Einführung in die Forschung*. Frankfurt am Main 1974, S. 186f. なお、本稿では『あるアカデミーへの報告』を語りの視点の観点から読解するため深く立ち入らないが、ユダヤ問題の文脈上で理解する解釈は、この物語がユダヤ人哲学者ブーバーとの関係において公開されたという経緯からも説得力を持つといえる。ロバートソンは、「西洋社会に

りの視点や人称といった叙述形式のレベルで具体的に分析するものは比較的少ない。しかしながら、後述するように『あるアカデミーへの報告』においては、語り手が「私」の視点を選択しているということが彼の実存と密接に結びついている。この物語の語りの視点（Erzähl-Perspektive）である「私」のあり方を分析することによって考察をはじめめる。

カフカの動物物語における人称の機能に言及する先行研究として、たとえばハルトムート・ビンダーは『あるアカデミーへの報告』の「私」視点の語りの特性について解説している。それによると、この物語の「私」の語りは「観察者あるいは、自らの過去から距離をとった報告者」の視点に基づいておこなわれ、それゆえ語りの内容が「客観的な真理」であるという印象を与える。³ このビンダーの指摘は重要な問題を提起している。たしかに、この物語の語り手ロートペーターは過去を回想するにあたって出来事を秩序付けながら再構築しており、その意味において彼は自己の経験を対象化し、批判的に意味づけることに成功しているといえるだろう。では、彼の報告内容は全面的に明証性をもったものと見做しうるのだろうか。報告の随所で浮上する語り手の自意識には、しかしながら彼が同時にまた、自己認識の水準においては事実誤認を犯していることが見てとれる。よって、彼の批判的な思考能力は、その報告内容が全面的に信用に値するということを示してはいない。ロイ・パスカルが指摘しているように、カフカの物語において語り手が具体的な人格として設定された場合、語られる内容は「信用を落とす」⁴ のである。つまりこの物語では、語り手がある面では高次の思考能力を有すると提示されることによって、彼の根本的な錯誤が余計に強調される仕組みになっているのである。

以上の主旨に基づいて、まず第1章では『あるアカデミーへの報告』の「私」の視点に焦点を合わせ、語り手ロートペーターの状況認識能力について考察する。またその際は、カフカの晩年の動物物語『ある犬の研究（Forschungen eines Hundes）』（1922）と比較をおこなう。そのうえで、第2章では、『あるアカデミーへの報告』の「私」の視点が、語り手のどのような動機によって採用されているかを、ジュネットの物語論を参照しながら検討する。それによって、この人称代名詞の選択が、語り手の人間社会における生存戦略と密接に関係していることを明らかにする。第3章では、ロートペーターの自己認識について論じる。本稿は、『あるアカデミーへの報告』の「私」という視点がもつ、上述のような二面性を明らかにする。

同化したユダヤ人たちを、シオニストが風刺した」作品として理解しており、またカフカの友人であり、カフカ作品の編集者でもあるマックス・ブロート（1884-1968）は、この物語が「ユダヤ人の同化についてこれまで書かれてきた風刺のなかで、もっとも素晴らしい」とまで評している。Alt, Peter-André: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München 2005, S. 518; Robertson, Ritchie: *Kafka. Judentum-Gesellschaft-Literatur*. Tübingen 1988, S. 218.

³ ビンダーによると、対象から距離をとった語り方を「私」の語り手におこなわせる、このような手法は、同時期のカフカ作品の特徴である。Binder, Hartmut: *Kafka-Handbuch in zwei Bänden*. Bd.2. Hrsg. v. Hartmut Binder. Stuttgart 1979, S. 222, 232f.

⁴ Pascal, Roy: *Kafka's Narrators. A study of his stories and sketches*. Cambridge 1982, S. 156.

1. 状況認識：経験を語る能力

1. 1 私の視点 (Ich-Perspektive) の機能

本節では『あるアカデミーへの報告』で用いられている「私の視点 (Ich-Perspektive)」の機能についてカフカの晩年の動物物語である『ある犬の研究』⁵ との比較を通して考察する。『あるアカデミーへの報告』と『ある犬の研究』は多くの特徴を共有している。内容の面では、両作品ともに動物の主人公による自伝的回想であり、またどちらも学問について言及している。形式の面では、どちらの物語でも語りの形式として私の視点が用いられている。似ているゆえ相違点もまた非常に際立つのである。

視点の問題に関して、「私」の名のもとにおこなわれる語りでは、観察者が自意識に囚われており自己を客観視できていない状況が多くみられる。それはたとえば『巣穴 (Der Bau)』(1923/1924) における私 (ich) と巣穴 (der Bau) の関係性である。この物語では、主人公の動物が顕在化しない外敵の脅威と、それに対抗するべく建築された巣穴をめぐる思考する。そこでは自己の観察像にとらわれて肥大化した「私」が観察の袋小路に陥る様子が描かれている。一方、先述のビンダーの指摘にもあったように、『あるアカデミーへの報告』の語り手ロートペーターは、これまで人間社会において体験してきた出来事を「私」の視点に基づき、観察者としての立場から語っている。

人間に捕獲されて以来、ロートペーターの目標は「出口 (Ausweg)」⁶ を見つけ出すことであった。この意味において、檻から解放されるのみならず「学会」という人間の集まりで報告をおこなうまでに到っているロートペーターはある意味では「成功者」であるといえる。もっとも、この「成功」は言葉通りの華々しい到達地点を意味しているわけではなく、彼の絶望的な状況を打開するための苦肉の策にすぎない。

私には出口がありませんでした。でもそれを手に入れなければならなかったのです。それなしでは生きていくことができなかったからです。(D 304)

生き延びるためという、緊急的かつ最低限度の欲求を実現するために「出口」が必要だったのだ。そして、ロートペーターが「出口」に到達し得たのは、彼が常に語る内容を自らのものとして引き受け、自分なりに整理し把握することに成功してきたためである。このことは、彼の

⁵ Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt am Main 1992. 以下同書からの引用はNIIと頁数を記す。

⁶ この *Ausweg* という語は、ロートペーターが檻からの脱出を望んでいたという背景に基づき、「逃げ道」と翻訳することも可能である。ただし、本稿では彼の「私はこの単語をもっとも日常的 (gewöhnlichst[]) かつ、もっとも十全な意味で用いているのです」(D 304) という発言をふまえ、より直接的に「出口」と訳した。

「私」の視点からの語りが「報告」全体を通して終始安定していることにもあらわれている。つまり、この物語の語りの視点の安定は、語り手の精神の安定をあらわしてもいるのである。⁷これは『ある犬の研究』における語りの視点の乱れを検討することで、より明らかになる。この物語では、語り手が「私」の視点を維持できなくなる場面が描かれているのである。

ここからは、『ある犬の研究』の「ひと (man)」の視点について考察する。『ある犬の研究』では、物語の語り手である一匹の老犬「私」が、彼が幼少期からこれまでおこなってきた「犬族」に関する研究について語り聞かせる。彼は、幼いころから犬族のあり方に違和感をおぼえていた。彼はある日音楽を奏でる不思議な犬たちに出会い、そのことをきっかけに犬族についての研究を開始する。犬族の中には、音楽犬の他にも空中に浮かんで暮らす犬や、「獵師」と呼ばれる犬など異なる様式で暮らす犬たちが存在する。学者犬は犬族のこのような生き方について考察するが、彼の思考は常に途中で脇道にそれ、放棄される。学者犬は物語の最後に、自身が学問的な能力に乏しく、その研究が頓挫していることを認めつつ、しかしそれでも自由を手に入れることができたのだと宣言する。

既に述べたように両作品は多くの共通点を持つが、それぞれの主人公達が物語の最後に到達する場所はまったく異なっている。ロートペーターが人間社会に居場所を確立するという目標を達成するのに対し、『ある犬の研究』の学者犬がおこなう研究はどれも半ばで放棄される。

ロートペーターの場合とは対照的に、学者犬の省察態度においては、その知覚能力が制限されているため研究の過程で出会う現象を論理的に説明付け、体系的に理解することができない。そして、この知覚能力が限られているということが『ある犬の研究』において重要な役割をもっているのであるが、それは音楽犬との遭遇の場面において特に際立っている。この遭遇の場面において学者犬は、自己防衛の手立てとして「ひと (man)」の視点からの語りをおこなっている。

この出来事について学者犬は「その後続く多くのことに指針を与える印象」(NII 427)を備えたものであったと回想しており、その衝撃の大きさが分かる。この場面ではまず音楽犬達との遭遇の様子に先がけて、主人公が当時まだ少年期であり、正体のわからない予感と、それゆえにもたらされる非常に鋭敏な感受性を持っていたということが、「至福な説明のつかない興奮 (seligen unerklärlichen Aufregungen)」(NII 426)、「荒々しい期待 (wilden Erwartungen)」(NII 427)、「予感 (Vorahnung)」(NII 427)といった表現によって示されている。そのように鋭敏な感受性を持っていたためにこれは主人公にとってより大きな衝撃、それはまたその衝撃ゆえに詩的でもあるのだが、⁸ 忘れない恐怖体験となったのである。

⁷ もっとも、後にみるようにロートペーターのこの安定的な思考は、彼の思考内容に矛盾が無いことを意味してはいない。

⁸ この出来事は、それが衝撃的な経験であるがゆえにこそ、同時に詩的经验たり得ている。ベンヤミ

始め「騒音」(NII 427 他)として捉えられたその音は、その後沈黙した七匹の犬が「高みへと」(NII 428)「魔法で呼び出す (zaubern)」(NII 428) 詩的な音楽として認識される。しかし、この音楽は学者犬にとって美的なものとして保持し続けられる対象ではありえず、徐々に彼に途方もない苦痛を与えるものへと姿を変える。その衝撃の大きさは「痛み」(NII 429)、「破壊」(NII 429)、「暴力」(NII 430)という言葉に読み取ることができるが、一際恐怖の強度を表しているのはこの場面において語りの形式が変わっているということである。音楽との遭遇という恐怖体験が描写されている箇所である「しかしまったく彼らを見なかった (Aber man sah sie ja kaum)」(NII 428. 強調は引用者による。以下同) から「彼らに、彼らはとても拒絶的に見えたのだが、呼びかけ、教えを請い、いったいここで何をしているのかを尋ねたかった (man wollte sie, so ablehnend sie aussah, anrufen, um Belehrung bitten, sie fragen, was sie hier machten)」(NII 429) までの部分で、それまでは主語として用いられていた ich が、ほぼすべて man に置き換えられているのである。この 1 ページ程の範囲に ich が主語として用いられている箇所はわずか 3 箇所であるのに対して、man は 13 箇所用いられている。たとえば、「彼らをいつも通りに観察した」(NII 429) の man がそうであるように、これらの man はいずれも実質的には ich (学者犬) を意味しているにも拘らず、この箇所では主語としての「私」が退けられている。ここでの ich と man の並存、人称の不安定な用いられ方が意味しているのは、この場面においての学者犬の内面的な不安定性である。ich での語りが、語り手が発言内容を自分に属するものとして引き受けることであり既に述べたが、遭遇した出来事あまりに衝撃の強いものであった場合、それを自分の経験として受け止めることは不可能となり、よって体験者はその体験を ich において、つまり自分の経験として語り得なくなる。そこで不定代名詞 man による語り、あたかもその出来事が自分の経験ではなく、見聞きした一般的な事実、あるいは第三者の経験であるかのような語り方がおこなわれるのである。⁹

ところで、経験という概念はベンヤミンによると以下のように二種類に分別される。

それはつまり、経験の直接的で自然的な概念を、認識連関の経験概念と区別することであ

ンは「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」の中で、ある「ショック (Chock)」は、それが意識によって「従順化された (pariert)」時に詩的体験でなくなると指摘している。それが意識的に理解された場合、「そうなる」とこの出来事は、(意識的な記憶のファイルにすぐさま編入されて)、詩的経験にとって不毛なものになってしまう」。Benjamin, Walter: Über einige Motive bei Baudelaire. In: *Gesammelte Schriften*. Bd. I·2. Abhandlungen. Hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt am Main 2013, S. 614.

⁹ なお、トラウマ的な経験を回想者が語ろうと試みる際、一人称で語ることができず「三人称 (aus der Dritte-Person-Perspektive)」の語りがあらわれるという現象は心理学においてよく知られている。Nijenhuis, Ellert: *Die Trauma-Trinität Ignoranz-Fragilität-Kontrolle*. Göttingen 2016, S. 304.

る。¹⁰

続けてベンヤミンはこの二種類の経験概念を「経験」と「経験の認識」¹¹と言い換え、その上で「非常に逆説的に聞こえるが、経験そのものが経験の認識の中に現れるということは決してない」¹²とする。つまり、ある出来事を自分の経験として語りうるためには、その出来事が思考に媒介され「自分の経験という意味においての経験」として認識されている必要があり、この意味において人が語りうる経験はすべて直接的な「事実」ではなく常に間接的なものである。また、語り手が、ある受け入れがたい衝撃的な出来事に遭遇した場合に、それを自らの経験として語るためには、その出来事が適切に思考に媒介され、間接的なものとして加工されている必要がある。そして『ある犬の研究』の学者犬が、自分の経験として語りえない経験、それは彼のその後の生き方を決定づけるほどの恐怖体験であったのだが、そのようないわばトラウマ的な経験を無理に語ろうとする時、自己防衛策として *man* が *ich* の代わりに主語の位置に据えられることになるのである。そしてこのような、あたかもその出来事が自分に関係のないかのような語り方をおこなうという自己防衛的な身振りがおこなわれることによって、逆説的にその体験の衝撃の大きさ、「私 (*ich*)」の経験としての引き受けが不可能であるためにその枠組みから漏れ出てしまう生々しい経験の存在が露呈している。つまり、この場面でみられるのは、語る主体によって置き換えられる *ich*、*man* という2種類の人称と、言語化可能な経験と語りえない経験、という2つの経験概念との合致である。¹³『あるアカデミーへの報告』における「私」の視点による安定した語りは、この経験が思考によって適切に媒介されていることの証左といえる。

もっとも、すでに述べたように、この語る行為、つまり経験の内面化の成功は語り手の認識が十全であることを意味してはいない。これについては結論部で述べるが、問題となるのはロートペーターの人間に対するアンビバレントな距離感である。議論を準備するために、次節では彼が人間をどのように位置づけているかを辿っていく。

¹⁰ Benjamin, Walter: Über die Wahrnehmung. In: *Gesammelte Schriften*. Bd.6: Fragmente vermischten Inhalts. Autobiographische Schriften. Hrsg. v. Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt am Main 1985, S. 35.

¹¹ Ebd.

¹² Ebd.

¹³ この物語では人称の分裂という不気味な方法でしか語られえない経験が描かれている。この分裂は、いわば経験を無理に言語化、つまり象徴化しようとした時に現れる裂け目である。そしてそれはジャック・ラカンの以下の定義に従えば現実界が顔をのぞかせている瞬間であると解釈できる。「主体が我が家に居ること、生活史を想起すること、そういうことはすべて、現実界と呼ばれるある限界の手前までしか進みません」、「逆に我々がここに見るのは、主体がそれ自身いくつかの審級へと分裂されることによってしか近づくことのできないある点です」ジャック・ラカン『精神分析の四基本概念』（小出浩之／新宮一成／鈴木國文／小川豊明 訳）岩波書店 2008 年、65 頁、68 頁。

1. 2. ロートペーターの観察：批判的なまなざし

ロートペーターの「報告」からは、彼が人間たちを批判的なまなざしで観察している様子がかがえる。たとえば、彼の報告においては「自由 (Freiheit)」という名詞が合計9回用いられているが、そのすべてが否定的な価値を帯びている。そして、ロートペーターによると、この自由を過大評価するという誤りを犯している存在こそ、人間にほかならない。

私は意図的に自由と言わないのです。私が言わんとしているのは、全方向へと開かれた自由という、あの偉大な感情ではないのです。[...] そして私はその感情に憧れる人間たちとも仲良くなりました。しかし、私としては当時も今も自由を求めてはいません。ついでは言う、自由ということについて人間たちはあまりにも頻繁に勘違いをしています。自由がもっとも崇高な感情に数え入れられているように、それに応じた思い違いもまた、もっとも崇高なものに数え入れられているのです。(D 304)

自由に関して勘違いをしている人間の代表例として、ロートペーターは、彼が所属するヴァリエテの空中ブランコ乗りを挙げている。猿のロートペーターから見れば、彼らの振る舞いは猿の身軽さを模した劣化版の芸に過ぎず、単に「神聖な自然 (heilige] Natur)」(D 305) を「冒瀆 (Verspottung)」する行為に過ぎない。人間は自由を求めるが、彼が目指したのは、あくまで「出口」であったと「報告」の中では度々強調される。捕獲されて以来、常に人間のそばに身を置き人間社会で暮らしながらも、その価値観からは距離をとりつつ人間を観察するロートペーターの態度が描き出されている。しかしながら、そのようなロートペーターが見出す出口は、皮肉なことに「人間という出口 (Menschenausweg)」という矛盾に満ちたものであった。それは人間を真似るという打開策である。彼は檻の中から常に人間たちを観察し、もし自分が彼らのようになれば、目の前の「柵が引き上げられ」(D 307) 自分も彼らのように思いのままに外を歩くことができるのではないか、と希望を抱くようになる。そうして、「蓄積された観察が、私をはじめて特定の方向〔人間を真似る芸を磨くこと〕に押しやる」(D 308) のである。その後、人間の様々な振る舞い ― つばの吐き方やパイプのくわえ方、コルクを抜いて瓶から蒸留酒を飲むこと ― を覚えていく。こうして真似る技術を向上させていくことで、彼は檻を脱して現在のヴァリエテに居場所を得ることになったのである。人間の価値観を批判しつつも人間のようには振舞ってみせるという芸に活路を見出すという選択は、主体的な決定ではあるが矛盾した行為であり、またこの矛盾が物語に皮肉なおかしみを生み出している。

ところで、人間を真似る様子をロートペーターに饒舌に語らせながらも、カフカが彼に、人間になったのだと一度も言わせないことを見逃してはならないだろう。先行研究では、ロートペーターが人間社会に居場所を築いていく過程が、しばしば彼の人間になろうとする試みとみ

なされる。そこでは、人間を観察し、真似るロートペーターの姿や、彼のかつての生活の忘却が「人間化 (Menschenwerdung)」(下線引用者) への道筋と表現されるのだ。たとえばペーター＝アンドレ・アルトは、ユダヤ人の同化政策がロートペーターの「人間化」と符合すると主張している。¹⁴ また、ヴィルヘルム・エムリッヒは、「この上なく努力することによって、彼(ロートペーター)は、猿としての実存に打ち勝ち (überwinden)、人間になること (Mensch zu werden) に成功する」(下線引用者) と述べている。¹⁵

ただし、「人間化」という表現には留保が必要である。

私は人間のように計算してはいませんでした。しかし、周囲にいる人間たちの影響で、まるで計算したかのように振舞っていたのです。

計算してはいませんでした、けれども落ち着き払って観察をしていました。私は人間たちが行ったり来たりするのを見ていました。(D 307)

ロートペーターは、人間の真似を覚えた当初に自らがおこなっていた人間的な行動が、しょせん真似でしかなかったと自覚している。人間を観察する主体として自己を確立してきたがゆえに彼は、本来は捕獲された猿という観察される客体でありながらも、目標であった「出口 (Ausweg)」に到達することができたのである。

このように、ある程度は冷静な思考を持つにもかかわらず、彼は、自らが最終的には人間の「レベル」に達したのだと勘違いしており、また自らが猿ではなくなったと錯誤している。これについては後述する。自分が人間になったのだと直接的に発言しない、そのような慎重さをロートペーターに付与することで、その錯誤が強調される。

ここまでみてきたように、「私の視点」で語るロートペーターの状況認識は安定しており、またそのような思考を基盤としておこなわれる人間たちについての観察は彼に、人間社会という出口への道を開いている。

では、この出口に到達するために必要な条件とは何であったのか。それは結局のところ、社会参入についての承認を人間たちから得ることである。次章では、再び語りの視点について考察することで、この問題を明らかにする。

¹⁴ Alt, Peter-André: *Franz Kafka. Der ewige Sohn. Eine Biographie*. München 2005, S. 521.

¹⁵ もっとも、エムリッヒの指摘の主眼はより普遍的なレベルにある。彼は、ロートペーターの「人間化」が持つ問題点を分析することによって、この物語が近代の「進歩イデオロギー (Fortschrittsideologie)」の負の側面を暴き出していると論じている。Emrich, Wilhelm: *Franz Kafka*. Hrsg. v. Franz Wolf. Frankfurt am Main 1957, S. 128.

2. 「私」語り形式の選択：主観性を告白するという戦略

『あるアカデミーへの報告』の「私」視点の語りは、語り手ロートペーターが彼の実際的な目的に基づいて選択した戦略という側面が強いといえる。以下、「私」形式の選択が語り手のどのような動機によって採用されているのかを考察する。

はじめに、カフカが「私 (ich)」と「ひと (man)」という語りの視点についてどう捉えていたかを確認するために、カフカの初期の草稿『田舎の婚礼準備 (Hochzeitsvorbereitung auf dem Lande)』(1907) から原文とともに引用する。

そして君が〈私〉と言う代わりに〈ひと〉と言っている限り、それは何でもないことで、そしてひとはこの話を打ち切ることができる。君がしかし、君自身がそれであることを認めるやいなや、君は文字通り穴をあけられ、そしてぞっとさせられる。

Und solange Du »man« sagst an Stelle von »ich«, ist es nichts und man kann diese Geschichte aufsagen, sobald Du aber Dir eingestehst daß Du selbst es bist, dann wirst Du förmlich durchbohrt und bist entsetzt.¹⁶

『田舎の婚礼準備』の主人公ラバンは、彼の日頃の役所での労働について内省している。微妙な判断を求められる現場においては、ある状況に対して下された決定が、自らの判断によるものだと明言することは危険を伴う。それは、判断を下す、という介入行為をとおして自らも状況の一部になってしまうためである。これは当時カフカが裁判所で実習をおこなっていた時の様子を反映している。

前節では、「私 (ich)」視点による語りが、ある経験が主体によって受け止められていることを表し、他方で「ひと (man)」視点の語りにおいては主体が体験を受け止めることができない状況が露呈すると論じたが、この引用箇所でも両者のもつ効果が比較されている。「ひと」は特定の人物でなく漠然と人を表す時や一般的な事実を描写する時などに用いられる不定代名詞だが、その自己防衛の働きがここでも述べられている。その働きとは、自分の発言内容が客観的な事実であり、自分の意思が介在しないと明示することによって、聞き手からの追及を逃れることを可能にするものなのである。この語りにおいては「私」としての意思の表明を希求しながらも、保身や実務的な効率のために主体性を自ら隠蔽することを強いられた状況が明らかになっている。対照的に、「私」の名のもとに語るとき、語り手は、語る内容が自らに属するものだと認めることになる。このような語りが、語る主体の安定性を示すのであると前節で述べたが、では、そもそも語りの形式に「私」の視点が採用される動機をどのように考えるべきだろ

¹⁶ Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente I*. Hrsg. v. Malcom Pasley. Frankfurt am Main 1993, S. 14.

うか。アカデミーに報告を提出するという学問的な舞台設定からすると、本来「私 (ich)」の視点による語りは不適当なはずである。学術的な正当性を主張するためには、報告内容が客観的事実に基づいていることを提示する必要がある、その点「私」の視点のもとにおこなわれる語りは主観性を全面に押し出したものとなってしまう。つまりここでおこなわれているのは、語る主体がわざと控えめに、報告内容を絶対的で普遍的な真実としてではなく、主観的かつ例外的で特殊な事例として提出することによって、かえって学術向きの客観性・普遍性をねらうという屈折あるイローニッシュな方法である。¹⁷

ジュネットはその物語論の中で、手紙や日記においては、語り手が存在する時間と、語られる出来事が生じた時間との間に生じる「時間的ずれ」および、語り手と語る時点での彼の思考や感情との間の「絶対的同時性」がともに成立していると論じている。¹⁸

日記と手紙による告白とは常に、ラジオ放送の用語で言うところの生放送と録音放送、つまり内的独白に近いものと事後的な報告とを合せ持っている。¹⁹

ロートペーターが作成する「報告」においても、作成しているロートペーターの時間的位置と、彼が報告の中で回想する過去の出来事との間には時間的な隔たりが存在している。そして、当然ながらこの二つの時間軸においては、前者に属する「物語る〈私〉*erzählendes Ich*」が後者に属する「物語られる〈私〉*erzähltes Ich*」に優越する。²⁰ つまり、ロートペーターは彼の、(報告を作成している)現在の目的に合わせて報告内容を編集、推敲する権利をもっているのである。その目的とは、自身の人間の世界において生活基盤を築く試みが成功している、という事実への承認を得ることである。この観点に基づき、彼の自己認識に関する発言を検討すると、それが「報告」の読み手であるアカデミーの会員に向けたコミュニケーション行為でもあることが明らかになる。

猿の本性は転げまわって私から飛び去っていきました。(D 311f.)

これまで誰もしたことのないほどの努力によって、私はヨーロッパ人の平均的な教養を身

¹⁷ 『あるアカデミーへの報告』は、他の短編とともに 1920 年に『田舎医者 (Ein Landarzt)』というタイトルの短編集として出版される。当初カフカはこの物語を収録した短編集の名前を『責任 (Verantwortung)』とすることを計画していた。このタイトル案との関連において『あるアカデミーへの報告』で、語り手が主観性を告白することで発言内容への責任を回避する姿が描かれていると理解できる。Kafka, Franz: *Briefe 1914-1917*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt am Main 2005, S. 297.

¹⁸ ジェラルド・ジュネット『物語のディスコース』(花輪光／和泉涼一 訳) 水声社 1985 年、255 頁。

¹⁹ 同書、同頁。

²⁰ 同書、297 頁以下。

につけるに至ったのです。(D 312)

前章で言及した『ある犬の研究』の主人公である学者犬は、自身の晩年において彼のこれまでの歩みを総括的に回想するという立場にあった。それ対して『あるアカデミーへの報告』のロートペーターは今も「宴会や学問的な集まり」(D 313)において自身が「教養」を習得していることをアピールしなければならないのであり、いわばまだ地位を築いていく途上にある。これをふまえると、上記のような彼の自己主張は、単に自らの状況を報告する「確認的(constative)」なものではなく、むしろ報告的、宣言的な言明によって新たな状況を構築しようとする「行為遂行的(performative)」な発言とみなすべきだろう。²¹ このような動機に基づいて、「私」の視点は学会への報告に採用されているのである。²² 前節で確認したように、「私」の視点を保持して語ることによって、ロートペーターは自身の内面の安定性を提示しているのだが、それもまた自らの「報告」を通して人間社会における地歩を固めるという目的のための戦略として機能している。ところで、物語の結びでロートペーターは、「報告」について人間の評価を得たいとは思わないと語っている。

その他の点では、私は人間の判断は求めません。私はただ知識を広めたいだけなのです。私は報告しているだけです。あなた方、アカデミーの高貴なる皆様にも、私はただ報告したに過ぎないのです。(D 313)

ロートペーターが人間の判断を求めているのであれば、そもそもこのような発言をおこなう必要はなく、自らの経験を回想し「報告」を終えればよいはずである。ここでは、本来は不必要な発言をあえてせずにはいられないという態度によって、その実彼が、自立した観察者として承認されることを人間たちに切望しているという事実が露見している。

3. ロートペーターの自己認識

これまで確認してきたようにロートペーターは、目的に合わせて適切な手段を選択している。通常であれば、これは総合的な判断をおこなう能力を備えていることの証左ともいえるだろう。しかしながら、それにもかかわらず彼が根本的な誤謬を犯しているのが、自らの現在のあり方についての理解である。ロートペーターは、物語の端々で自身がもはや猿ではないという認識を披露する。

²¹ J・L・オースティン『言語と行為』(飯野勝巳 訳) 講談社 2019 年、17 頁以下。

²² パスカルは前掲書において、ロートペーターが自らの成長をいかに説得的に語るかについて非常に意識的であると指摘している。Pascal, S.193.

かつての猿（ein gewesener Affe）が人間の世界に侵入した（D 300）

しかしながら、ハーゲンベック社においては、猿は木箱に入れられることが決まっているのです。それで、このようなわけで私は猿であることをやめました。（D 304）

自らにとって猿というあり方がすでに過去のものであるという主張は、前章で論じたような「行為遂行的」な面を持つのだが、それでも、その意図を阻害するかたちで「報告」からは、彼の中に未だ猿の習性が色濃く残っているという事実が漏れ出している。それはたとえば彼の、「夜遅くに宴会や、学問的な集まり、くつろいだ会合から帰宅した」（D 313）後に、「調教途中の小さなメスのチンパンジー」（Ebd.）とともに「猿の流儀で彼女のそばで快適にすごす」（Ebd.）という現在の習慣の告白である。彼が自らのこれまでの人生行路、人間社会への適応という挑戦とその歩みをどれほど語ろうとも、現在の習慣には野生の痕跡が色濃く刻まれている。ロートペーターは、このメスのチンパンジーの瞳に浮かぶ「調教され混乱した動物の狂気」（Ebd.）に不快感をおぼえると告白する。しかし、この瞳に彼が見て取る狂気は彼自身の狂気の反射ともいえる。同様の観点から考えると、ロートペーターは自身が現在ヴァリエテで活躍し、人間社会へ参入したと語るが、周囲の人間から見ると彼が今も猿であることは明らかである。詰まるところは、彼が猿の模倣であると非難した空中ブランコ乗りの曲芸と彼の人間的な振る舞いは大差ないといえるだろう。

そもそも、カフカにとっては、語り手が自身について告白する自伝という試み自体が危ういものであった。

それは伝記ではなく可能な限りの小さな構成要素の調査と搜索である。[……] ひどいのはむしろ、建築の中央でその力が途絶えて、そして今その家が確かに不安定ではあるが、しかしそれでも十全な、半分崩壊しそして半分完成した状態、つまり無である。（NII 373）

このカフカの断片で描写されている建築のように、半ば理性的に、半ば盲目的な思考に基づいて作成されたロートペーターの「報告」もまたいびつである。

4. 結論

外的な事象や他者については冷静に語ることができる主体が、自らのあり方について誤解しているという状況はなんら特別ではなく、一般的だといえる。語り手が自らの主観性を自認しているということは、語り手が全面的に客観的であることを示してはいない。これまで論じてきたように『あるアカデミーへの報告』においても、ロートペーターが自己認識において非常

に素朴なレベルを脱していない状況が暴き出されている。そして、この物語では、語り手がある面では冷静に判断する能力を備えていると提示されることによって、認識能力の二面性とその落差が一層際立つ仕組みとなっている。この異なる認識レベルの並存に基づく立場からの語りには、人間の判断を等閑視すると宣言しつつも、人間社会への参入を「進歩 (Fortschritt)」(D 312) と嬉々として語るような二律背反的な発言が多くみられ、それがこの物語の皮肉な滑稽さ (Komik) を生み出している。中期の動物物語である『あるアカデミーへの報告』においては統一的な「私」の視点によって、そして晩年の『ある犬の研究』においては異なる人称の使い分けによって、語り手の認識審級の分裂が描き出されているといえる。

Ein subjektiver Erzähler

— Die Erzählform in Franz Kafkas *Ein Bericht für eine Akademie* —

YAMASHITA Daisuke

Ein Bericht für eine Akademie ist eine Erzählung von Franz Kafka, die im Jahre 1917 in der von Martin Buber redigierten Zeitschrift *Der Jude* veröffentlicht wurde. Der Protagonist Rotpeter ist ein Affe und lebt seit seiner Gefangennahme in der menschlichen Gesellschaft. Er wurde nun von der „Akademie“ aufgefordert, einen Bericht über sein „äffisches Vorleben“ einzureichen. Der Inhalt der Erzählung sind also die autobiographischen Erinnerungen eines Affen.

Weil die erste Publikation der Erzählung in einer Zeitschrift des jüdischen Philosophen Buber erfolgte und weil die Lebensumstände Rotpeters, eines „in die Menschenwelt eingedrungenen“ Affen, an die Assimilation der Juden erinnern, wurde der Text in der Forschung bisher oft unter den Aspekten des Judentums und des Existenzialismus interpretiert, wobei eine Beschäftigung mit seiner Narratologie eher zu kurz kam. Betrachtet man jedoch die Erzählperspektive genauer, tritt die eigentümliche Funktion ans Licht, die die Ich-Perspektive für das im Text Erzählte hat.

Rotpeters „Bericht“ wendet sich an eine „Akademie“, d. h. an eine wissenschaftliche Institution. Man müsste also eigentlich erwarten, dass er sich bei seiner Darstellung um die Objektivität bemühen würde, die für wissenschaftliche Zwecke erforderlich ist. Aber Rotpeter gibt immer wieder zu verstehen, er sei an einer Anerkennung durch seine Adressaten nicht interessiert, er wolle „keines Menschen Urteil“ oder er „berichte nur“. Solche Aussagen aus einer subjektiven Ich-Perspektive sind als eine Strategie zu verstehen. Indem er die Subjektivität seines Standpunktes eingesteht, nimmt Rotpeter paradoxerweise insofern eine gewisse Objektivität für sich in Anspruch, als er sich zumindest der Begrenztheit der eigenen Darstellung bewusst ist.

Das wirft die Frage auf, worauf sich seine Erzählstrategie eigentlich richtet. Er sagt wiederholt in seinem Bericht, er suche „nur einen Ausweg“, genauer gesagt, einen „Menschenausweg“. Während er also einerseits zu den Menschen auf Distanz geht, verspürt

er doch andererseits den Wunsch, sich mittels seiner Position als Berichterstatter in der Menschenwelt etablieren zu können. Dabei erkennt er, dass er auch in dieser Rolle immer ein Außenseiter bleiben wird, mag er sich auch noch so oft als „ein gewesener Affe“ bezeichnen oder sagen: „[...] nun, so hörte ich auf, Affe zu sein.“ Letztlich sind die Bedingungen seiner eigenen Existenz für Rotpeter unfassbar. Kafka strukturierte *Ein Bericht für eine Akademie* so, dass, je mehr der Erzähler seine menschenartige Rationalität unter Beweis zu stellen versucht, seine tierische Naivität desto deutlicher hervortritt. Das erzeugt die ironische Komik dieser Erzählung.